

財団法人松江市教育文化振興事業団
埋蔵文化財課年報XII

平成19年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江城下町遺跡（殿町287番地・279番地他）

【所在地】 松江市殿町287番地・279番地他

【調査原因】 松江市歴史資料館（仮称）整備事業

【調査面積／期間】 3,155㎡／平成19年5月17日～
平成20年8月15日（予定）

【調査地の歴史】

松江市旧市街地は、1607年からの松江城築城に伴い城下町として造成された区域で、江戸時代以前には、湿地帯が広がっていたとされている。本調査地は、江戸時代を通じて重臣の屋敷が配置されていたことが絵図面等でわかっており、2～3軒の屋敷地がかかると想定される場所である。文献からは、石高3,000～10,000石をもつ有力な家臣が配置されていたことがわかっている。

廃藩置県後の分筆により、屋敷地は切り売りされ、現代に至るまで20軒近くの宅地で分割されてしまっている。

【調査の概要】

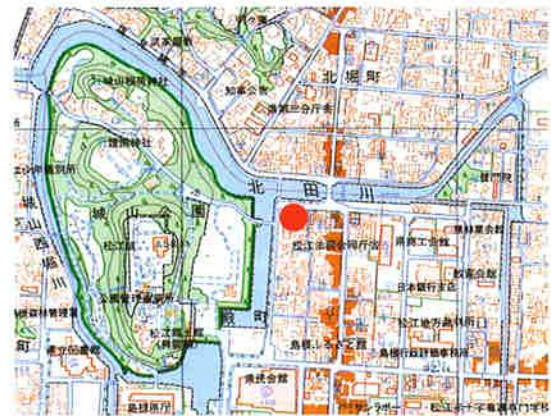
本調査は、H18年度に行なった調査区の東側と南側についておこなったものである。来年度も調査は継続予定であるため、今年度の調査で判明した成果のみをとり上げることとする。トレンチによる土層断面の確認で、遺構面が4面あることが想定され、これをもとに遺構の検出をおこなった。今年度は、主に、第1面から第3面を検出しており、部分的に第4面も検出している。また、トレンチの一角では、屋敷境を示す石組水路が見つかり、城下町形成当初から現代にいたる面までほぼ踏襲されていることが判明した。

第1面は、明治期の分筆後に削平・造成がくり返されたため、江戸期の遺構の抽出が困難であったが、いくつか貴重な資料を得ることができた。屋敷境北側で2段の階段をもつ石組遺構が検出されたことや、屋敷境南側で執り行われたと推定される祭祀に関する祈祷具が出土したことが挙げられる。遺物は、幕末以降の陶磁器片が多量に出土している。

第2面も、第1面の造成時に削平をうけたようで、明確に屋敷地内の建物を推定できる材料に乏しい。屋敷境から北側で、菜園を想像させるような溝状の遺構を検出した。また、同じく屋敷境北側で、門柱と推測される根がらみをもつ角柱2本と、それに並ぶ柱列を検出した。遺物は、18世紀代の陶磁器片などが出土している。

第3面は、屋敷境の北側で、「佐々九郎兵衛」銘の木簡や大量の陶磁器片、木製品が廃棄された土坑が見つかった。17世紀中頃から後半までの遺物が出土している。また、建物の存在を窺わせる小石敷群が検出された。屋敷境南側でも、廃棄土坑6基がほぼ重ならない状態で検出された。大量の陶磁器片、木製品とともに廃棄土坑から獣骨や貝などの食糧残滓が出土している。その他、「有澤織部」銘の木簡や石製落款も出土している。時期は、17世紀中頃から後半にかけての遺構である。屋敷境南側では、南北約3間に並ぶ根石をもつ礎石列を確認した。

第4面は、城下町形成当初の堀尾期に対応する遺構面である。調査区全体のなかで高低差はあるものの、おおむね標高1m前後に存在する黒褐色粘質土層（通称チョコレート層）に、さまざまな造成

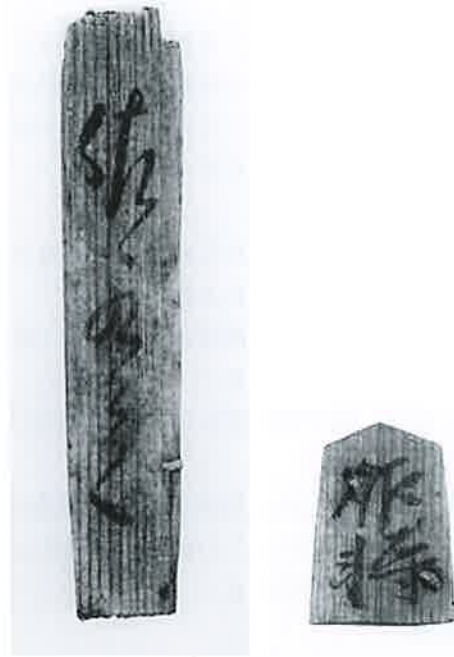


土を使い整地された面である。屋敷境北側では、南北4間×東西2間もしくは南北9間×東西2間の礎石列が検出された。東西の規模が調査区内で収まるものであれば、長屋が想定できるものである。

本調査は、現在堀尾期の遺構面を全体的に検出していく作業を行なっているところである。この面は、遺構の残りが非常に良いと推測されることから、今後の調査で城下町形成当初の重臣屋敷の具体像が解明できるものと考えている。
(徳永桃代・落合昭久)



<石組遺構>屋敷境より北側



「佐々」銘木簡 将棋の駒「銀将」
<廃棄土坑>屋敷境より北側



<祈祷具出土状況>屋敷境より南側

内箱の蓋表に書かれた「橘 明喬」は、19世紀中頃に存在した大阪の易学・易占家 松浦茂斎であることが判明している。このような江戸時代の祈祷の具体像がわかった出土例は、全国初となるものである。



<祈祷具内箱内部>

城下町遺跡（母衣町68番地）

【所在地】松江市母衣町68番地（広島高等裁判所松江支部）

【調査原因】都市計画県道城北・北公園線拡幅予定（通称大手前通り）

【調査面積／期間】180㎡／平成19年10月下旬～平成20年2月中旬

【調査区の設定】調査区は、裁判所正面敷地という立地条件を考慮し、前庭東部を調査1区、前庭西部を調査2区、正面玄関部を調査3区に設定し、平成19年度は「調査1区」の発掘調査を行った。



【調査地の歴史】

松江市旧市街は、1607年からの松江城築城に伴い城下町として造成された区域で、江戸時代以前には、湿地帯が広がっていたとされている。

ここ母衣町は、江戸時代西隣の殿町と共に城郭内を意味する「^{うちさんげ}内山下」と呼ばれ、武家屋敷が整然と建ち並んでいたようである。

本調査1区は、堀尾期絵図から落合氏300石、松平期絵図から速水氏100石の武家屋敷が建っていたとされている。

明治23年、現在の広島高等裁判所松江支部の前身「松江始審裁判所（明治15年改称）」がここに新築移転した。明治元年からこの間、武家屋敷は少しずつ切り売りされているようで、最終的には裁判所管理地となったものである。

【調査の概要】

遺構は、江戸時代後期の石組、ゴミ穴土坑、井戸が、江戸時代前期と考えられる帯状落込みが検出された。遺物は陶磁器片6,200点を数え、内石組埋め土から2,800点が出土しており、大半が18世紀中期から19世紀初めにかけてのものである。江戸時代の明確な生活面は検出できなかった。

松江城下の特徴として幾重にも盛り土を施し、敷地を造成していることから、平面での遺構検出は極めて難しく、深掘りしてからの検出や、土層断面からの検出が大半であった。

【江戸後期の遺構】

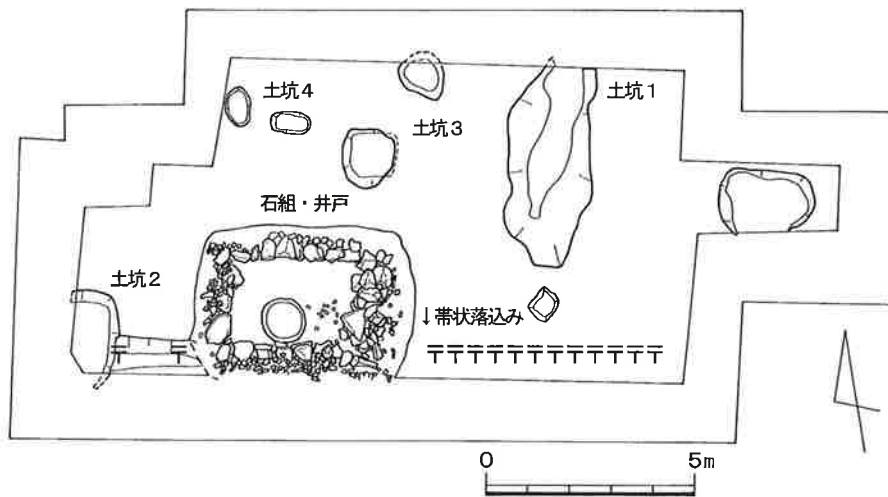
・石組と井戸

調査区中央南側に位置している。東西長5m×南北長4mの角が丸い掘り方から「方形の石組」が検出された。石組の内法は、東西長2.6m×南北長2mを測り、大海崎石・島石・産地不明石等により概ね2段積み^の遺存状態であった。石組の掘り方検出は標高1.1m、石組検出は標高0.5m付近、円礫・瓦片を敷いてある底部検出は標高マイナス0.25mを測る。石組埋土出土陶磁器片は、上部から底部にかけて点在しており、石組の隙間には、松葉が詰め込まれていた。

掘り方プランからは、埋土とは明らかに違う円柱状粘土塊（直径約1m）が、南西側に検出されている。粘土塊中心には、長さ1.3m×径約4cmの竹筒（節抜き）がほぼ垂直に埋め込まれていた。埋土からは、この粘土塊に伴う掘り方は検出されていない。

粘土塊を掘り下げると段差を持つ円柱状の掘り方が検出され、この段部から直径80cmの竹製タガが出土した。この円柱状掘り方は砂で埋められており、底部は標高マイナス0.79mを測る。この粘土塊・砂は井戸埋土と考える。

粘土塊の脇、標高0.4mから、1辺9cmの木箱が出土している。木箱外面底部に梵字「ボロン」の



城下町遺跡 母衣町68番地 調査1区 遺構位置図



1) 石組
底部右上に井戸痕跡



2) 石組と井戸の断割
南西側から



3) 自然堆積層
灰色砂層と黒褐色土



4) 西壁土層 左手奥に土坑2の掘り方が見える

一文字が墨書きしてあり、箱内には2枚のカワラケが拝み合わせて収納されていた。井戸埋め戻しに伴う儀式と考えられる。

なお、石組の内面角部3箇所は、しっかりと石積みで造作してあるが、南東側の角は、石が無く階段状に石を配しているように見受けられた。また掘り方東壁と石組との間には奥行きがあり、その幅約30cmを測る。

・土坑1 (ゴミ穴?)

調査区東側に位置している。北側から南側に落ち込む谷状のくぼみから陶磁器片・木片などが出土している。検出は標高1.3m、底部は標高0.58m、長軸4.9mを測る。上層部では不規則な石の集石(投げ込みか)が検出されている。遺物は、陶磁器片約240点を数え、「織部取手付角皿」の模倣品が出土している。大半が19世紀前半と考えられる。

・土坑2 (ゴミ穴)

調査区南西端部に位置している。西壁面の土層観察から土層からの掘り込みが確認できたが、実質はかなり掘り下げてからの検出となった。出土陶磁器片は約60点を数える。西壁での検出は標高1.04m、底部は標高0.20mを測る。最下層は厚約10cmの木くずや小木片が堆積している状態であった。

・土坑3 (井戸?)

調査区ほぼ中央に位置している。検出は標高1.12m、底部は標高マイナス0.59mを測り、深さは1.7mとなる。この土坑は、一辺約1.2mの隅が丸い方形でほぼ垂直に掘込まれている。底部から長軸18cmのアワビ殻1枚と瓦片が3枚出土している。瓦はいずれも平瓦で、1点は長軸42cmを測る。出土陶磁器片は17点を数え、在地産と思われる植木鉢片が標高0.08mから出土している。

・土坑4 (ゴミ穴)

北西部に位置している。長軸約1mの小判形で検出は標高0.93m、深さ約10cmを測る。底部に有機物堆積が見受けられた。上部は消失しているものと考えられる。

・不明土坑

土坑が4箇所検出されたが、遺物・堆積物もなく用途不明の土坑である。

[江戸前期の遺構]

・带状落込み遺構

調査区南側に沿った調査用排水路から検出されており、大手前通りに下降する。検出は標高0.41m、調査区内で確認できた幅は約1.2m、落差は約50cmを測る。自然堆積砂層に人為的に掘込まれている斜面には、有機物堆積が見受けられ、17世紀前半の陶器片数点が出土している。

[土層]

標高0.1mで明らかな自然堆積層(灰色砂層)が検出され、その直上に厚20cmの「黒褐色粘質土(通称チョコレート層)」が検出された。このチョコレート層に関しては、「自然堆積層」否「人為的造成土」と地質関係者の間でも意見が分かれている。

何れにせよ、これら2層は調査区全体に広がっているものと思われる。

最後に、江戸時代においては“お江戸”に限らず、生活用水の確保、ごみの処理等に苦労した様子が、ここ松江でも窺い知ることができた。また当時の遺構面が、はっきり検出できなかったことは、屋敷地前庭での人為的造作が極めて少なかったとか、造成時において表土剥ぎ取りの作業が行なわれたのではとか、様々な推測が考えられ、今後の調査課題と言えよう。

自然堆積層の灰色砂層や直上の「チョコレート層」に関しては、城下町の古環境を考える上で、また今後の城下町発掘調査においてのいわゆる「鍵層」に成りうるものとする。(柚原恒平)

松江城下町遺跡（米子町49の3他）

松江城下町遺跡（米子町49-3他）は、松江市米子町に所在し、松江城からは、西に約600m離れた場所に位置し、堀尾期の城下町絵図から城下町造成時当初は武家屋敷であったと推定出来る敷地の一角である。今回の調査は、三角形の調査地（南北最大約10m、東西最大6mほどの小規模な面積だったが、比較的まとまった数の遺物と、江戸時代の遺構面を4面検出することができた。調査期間は平成19年7月23日から平成19年8月10日まで、調査面積は約60㎡である。

調査地上面は攪乱されていたものの、2箇所のゴミ穴状遺構と、それぞれの遺構面で柱穴跡を確認出来た。

ゴミ穴は切り合いがある新旧のピットで、敷地内の利用用途として時期が異なっても、引き続きゴミ捨てを行う場所であったことが判る。また、明確な礎石建物は確認できなかったが、第2遺構面から第4遺構面まで、掘立柱の建物があったことが推定でき、何らかの簡易な施設を継続的に設置していた場所であったことが確認できた。いずれの遺構も屋敷内の土地利用の状況を示す貴重な調査例となった。

各遺構面の形成時期は、肥前系の比較的時期の特定しやすい遺物だけをとってみれば、第1遺構面は17世紀後半以降、第2遺構面は17世紀中頃、第3・4遺構面は17世紀前半を推定している。今後、詳細な検討を加えていきたい。（中尾秀信）



松江城下町遺跡（米子町40の4他）

城下町遺跡（米子町40-4他）は、通称大手前線の拡幅事業に伴い、平成19年4月に松江市教育委員会が行った試掘調査により、遺構・遺物が確認されたことから、その存在が判明した遺跡である。調査期間は平成19年6月14日から平成19年7月19日まで、調査面積は約50㎡である。

本遺跡は、松江市米子町に所在し、松江城から西に約600m離れた場所に位置する。堀尾期の城下町絵図にすでに米子町との記載があり、米子から連れてきた職人を住ませた町屋があったことが伝えられている。現在、調査地は米子川から一区画離れた場所に位置しているが、川沿いの区画は、昭和31年に埋め立てられており、城下町の造成当初は、調査地から道を隔てて、すぐに米子川であったようである。調査地の周囲では、すでに城下町遺跡の調査等が実施されており、城下町造成当時の様子が次第に明らかにされつつある。

調査地は、城下町遺跡の調査としては、初めての町屋跡の調査となった。たいへん豊富な資料が検出され、今後の指標ともなる貴重な資料を得た。遺構としては、良好な礎石が検出され、また、調査結果を整理するにあたり、各遺構面での土地活用の実態が明らかになり、城下町形成からの町屋の変遷状況をうかがい知ることができる可能性もある。

（中尾秀信）



松江城下町遺跡（南田町）

市道北公園線（通称：大手前線）拡幅工事に伴って断続的に発掘調査が実施されているうち、平成19年8月1～10月31日にかけて、南田町77-1番地と南田町52-1番地において発掘調査を実施した、調査対象面積200㎡である。

調査地は周知の近世城下町遺跡の部分に該当するため、歴史地理学や近世史などの資料が豊富な遺跡でもある。これらの研究成果などを見ると当調査地である南田町は17世紀初頭の松江築城と共に沼沢地を埋め立てて作られた場所であり、100石～300石程度の中・下級武家屋敷が並んでいた。

一般に近世城下町は身分別で居住区が分かれる。殿町周辺の上級武家屋敷とは対照的に、南田町付近は中・下級武家屋敷であった。しかし、松江の場合は石高による住み分けはそれほどはっきりしていなかった様子であり、南田町より西の米子町には町屋が存在している。

松江城下町の景観は江戸時代を通じてほぼ変化しないが、明治に入って変動し武家屋敷から一般住居へと変化してゆく。特に南田町では、防火対策の一環として太平洋戦争末期の昭和20年代に倍近く道幅が拡大した。

今回の発掘調査では、長期にわたる土地利用のための攪乱層のため明確な武家屋敷の痕跡などは検出することができなかった。その反面、地山付近にて江戸時代初期の造成工事に伴うであろうウラジロや杭などを検出することが出来た。

これらの調査の結果、造成以前の地山は沼沢地形であること、この軟弱な地盤の上に軟弱な青灰色粘質土を乗せて、上面だけ叩きしめて城下町形成している様相が考古学的に確認することができた。

（藤原 哲）



佐太前遺跡

佐太前遺跡は、昭和20年代に発見された遺跡で、鹿島町立歴史民俗資料館建設に伴い、昭和60年度には発掘調査が実施され、弥生時代から中世に伴う遺物が検出されている。

この遺跡に接して広岡川の河川改修工事が計画され、島根県松江市鹿島町名分、及び佐陀宮内地内において発掘調査を実施した。調査の対象面積は2,380㎡であり調査期間は平成19年11月1日～平成20年7月31日までであった。

今次調査地の現状は水田～畑地であったので、地形に応じてA～D区の調査地を設定した。B区では表土下から現状で2間×7間の大型建物と、それに伴う柱材を検出した。柱に伴う遺物が皆無であるために明確な時期は不明瞭であるが、角材であることや、その建物規模から中世の大型建物と考えられる。中世建物を検出した遺構面の下には条痕などが見られる縄文土器を主体とする遺物包含層が堆積していた。

C区～D区においてはピットや土抗などの他に弥生時代前期の大溝を検出した。この大溝から多量の弥生時代前期の土器や、鍬などの木製品、石包丁や石皿などの石器を検出した。また、これ以外では縄文時代の自然流路や包含層も検出している。

この度の調査では弥生時代前期の大溝を検出し、多量の弥生時代前期の遺物が出土したことを初め、佐太前遺跡では始めてとなる縄文時代の遺物も検出することとなった。また、中世の大型建物なども見つかっており、佐太前遺跡が縄文～中・近世にまで及ぶ大複合遺跡であることを改めて実感する結果となった。

(藤原 哲)



田中谷Ⅱ遺跡

田中谷Ⅱ遺跡は松江市西法吉町に所在する。調査は携帯電話基地局の新設事業に伴い平成19年6月1日～7月31日に実施されたもので調査面積は230㎡であった。

周辺地帯は大規模開発が進み、各時期の遺跡も多数知られている。中でも隣接する田中谷遺跡からは弥生時代の旧河道や建物跡、奈良・平安時代の掘立柱建物跡や加工段などが検出されている。

田中谷Ⅱ遺跡の周囲にも住宅団地が存在するが、調査地は丘陵斜面部分の傾斜地に位置し、現状は山林であった。表土直下からピットや加工段の遺構が検出された。

調査面積が230㎡と少ないために、詳細は不明瞭であるが、加工段を中心として9世紀の須恵器をまとめて出土した。また加工段やその他のピットの周辺からは炭なども多数検出している。

出土遺物は須恵器類の坏や皿、坏蓋などがほとんどで、煮炊きで使用するような土師器類はほぼ皆無である上、同時期の集落跡としては近隣の田中谷遺跡が想定されるため、本遺跡の加工段は生活跡、というよりは極めて簡易な作業場などであった可能性もあるだろう。
(藤原 哲)



小原遺跡

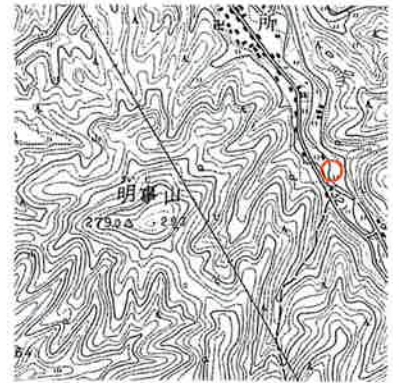
小原遺跡は鳥根県松江土木建築事務所（現：鳥根県松江県土整備事務所）による国道432号東岩坂バイパス改築（改良）事業に伴って小原遺跡の発掘調査を実施したものである。

国道432号道路改良工事予定地内の発掘調査事業は、平成6年度から八雲村教育委員会により継続的に実施されていたものであるが、平成17年の市町村合併後からは松江市教育委員会が調査事業を引き継ぐこととなったものであり、関連調査の報告書は八雲村より既に6冊の発掘調査報告書が刊行されている。

小原遺跡が立地する八雲町東岩坂は八雲町でも南東部にあたり、標高454mの星上山に源を発する意宇川の支流である東岩坂川流域に概ね該当している。東岩坂、特に遺跡が立地する別所地区においては、現在まで周知の埋蔵文化財包蔵地はほとんど知られておらず、遺跡地より更に奥部に小深草遺跡、大佐平遺跡、遺跡地東方の星上山山頂には星上五輪塔群、星上城跡などが知られるに過ぎなかった。

この度の調査は平成19年4月1日～5月31日までで、調査面積は300㎡であった。調査の結果は不規則なピット群や土壌などの遺構が検出しており、特に土抗S-68からは竜泉窯製の青磁、土師質土器の皿、銅銭（開元通寶か？）、鉄釘などを検出しており中世の墓抗だと考えられる。また包含層などからは縄文土器片や黒曜石石鏃も出土している。

小原調査の発掘調査は、別所地域において初めて考古学のメスが入ったという点で有意義な調査であった。調査面積が狭く、出土遺物も少なかったものの、縄文土器や石鏃、または14～16世紀の青磁や多数のピット群を検出し、縄文時代や中・近世の実証的な資料を得ることが出来た。この地域での今後の調査に期待するところが極めて大きいであろう。
(藤原 哲)



千酌条里制遺跡他・中殿遺跡

1. 発掘調査対象地 松江市美保関町千酌地内 現況 水田・畑地・休耕地
2. 調査対象面積 約6,324 h a
3. 調査面積 約701㎡
4. 調査期間 千酌条里制遺跡他発掘調査 平成19年7月2日～平成19年12月14日
中殿遺跡発掘調査 平成19年12月17日～平成20年3月3日
5. 周辺の地理・歴史的環境および調査に至る経緯

この地域は、南側に忠山や枕木山が迫っている小起伏山地に囲まれた谷間の集落である。また、北は日本海に面していて、天平5年（733年）に撰進された『出雲国風土記』にも「千酌浜」として登場する。この千酌の田園地帯は、美保関町では最も広い面積を有していて、しかも永年耕作されてきた水田の区画には「条里制」の痕跡がまだ残っているとされている地域である。更に、調査地の北側には、「岩山古墳群（7基）」（下図 周辺の遺跡）の古墳があり、東側に『出雲国風土記』にも登場する「千酌 駅」推定地である「修理田遺跡」が所在する。

この広い田園地帯が発掘調査の対象となったのは、圃場整備が計画されたためである。実地調査ではトレンチ（2×20m）20本を設定し調査した。拡張した箇所も含め総調査面積は、557㎡である。また、調査が予定より早く終了したため、20年度事業を一部前倒しして、中殿遺跡の調査を行った。調査面積は144㎡である。

6. 調査の成果

一部のトレンチで、丸木や割木を等間隔でX字状に組んだ暗渠施設を検出した。これらの暗渠施設は、耕作土下から掘り込まれ、田面より30cmぐらい下で検出されるのが通常であるが、2本のトレンチから検出されたものは、かなり深く使用されている木材も不整形で脆く現在の田に係わる暗渠施設とは、考えにくいものであった。これらの暗渠施設は、条里制に係わる可能性もあり、たいへん貴重な資料となった。ただし、残念ながら条里制の確かな痕跡である大畦等は、見出すことはできなかった。

中殿遺跡からは、遺構の検出はなかったもののたくさんの土器を採集した。その破片数は、959片。弥生時代後期～古墳時代中期の遺物がほとんどで、その内須恵器は、15%程度である。山際の調査区であるので、そばの小高くなったところに生活遺跡が存在する可能性が考えられる。（錦織慶樹）



千酌全景（岩山古墳群から枕木山方向を撮影）



- ①岩山古墳群（7基）
- ②葉ア多古墳群・葉ア多遺跡
- ③千酌条里制遺跡
- ④千酌五輪塔
- ⑤修理田遺跡
- ⑥千酌空畑古墓（五輪塔）

千酌の遺跡

春日山古墳群・寺ノ脇遺跡

春日山古墳群・寺ノ脇遺跡発掘調査は、国道431号 手角工区特定交通安全施設整備工事に伴う発掘調査である。

【春日山古墳群】

春日山古墳群は松江市手角町春日山548-1に所在する。平成19年7月2日から平成20年4月30日にかけて10ヶ月間、調査を実施した。調査面積は1,470㎡である。

本調査区は春日山神社の南西側丘陵に位置する。標高30～25mの南西から南東に延びる尾根から古墳7基、土壙墓、土器棺墓、土坑などを、尾根から南西側斜面を下った平坦面から2棟の掘立柱建物跡を検出した。

古墳は尾根を加工して造られ、尾根上から5基、墳裾部分から2基の古墳を検出した。古墳は方墳が主体で、南西側尾根の最高所にある方墳が一番大きく、20×13mを測る。土層観察の結果から、この古墳が最初に造られ、順次、南東側尾根に向かって造られていた。

埋葬施設は二段掘りの墓壇に、刳抜き木棺や箱式木棺を据えたものが多くみられた。二段掘りの墓壇に箱式木棺を置いて主室と副室を作り、主室に砂混じりの礫を敷いたものや、礫敷きの上に刳抜き木棺（割竹形木棺）を据えた主体部を検出した。

出土遺物は少なく、刀子や土師器片、黒曜石が出土した。

本古墳群は埋葬施設の構造や大きさ、出土遺物から古墳時代前期後葉から中期にかけて築造されたと考えられる。また、中海を眼下に大根島や弓ヶ浜、遠くは大山まで見晴らすことができる場所に立地し、当時の主要交通路である中海の海上交通を掌握していた首長が埋葬されていたと推測される。

南西側平坦面で検出した掘立柱建物跡は、1棟が1間×2間、もう1棟は柱跡から、片屋根の建物跡と推測される。建物の床面や周辺からは近世の土師質土器が出土しており、その頃の建物跡と推測。

【寺ノ脇遺跡】

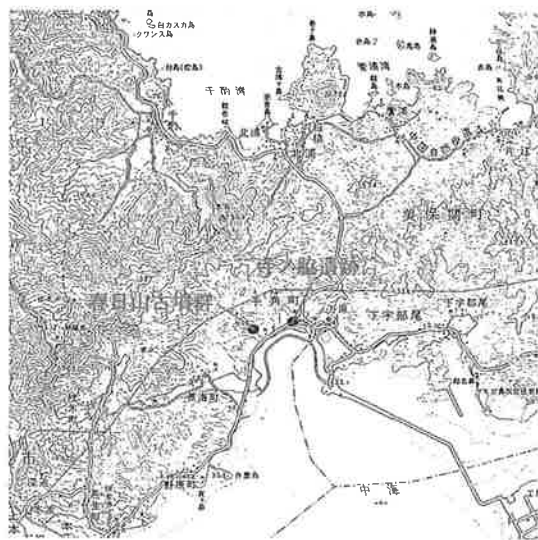
寺ノ脇遺跡は松江市手角町字町並72-3に所在する。全調査範囲（165㎡）のうち87㎡（Ⅰ区）について、平成19年5月1日から6月29日まで約2ヶ月間調査を行った。

調査の結果、遺構面2面を検出し、多くの土坑やピットを検出した。多くのピットを検出したが、建物跡は想定できなかった。

遺物は縄文時代から近世まで幅広く出土し、なかでも古墳時代前期の土師器が一番多くみられた。縄文土器は細片で、晩期のものが多かった。

昭和43～44年に調査がおこなわれた寺ノ脇遺跡発掘調査においても、縄文時代早期末頃から奈良時代の遺物が確認されている。今回の調査でも、幅広い時期の遺物が出土し、縄文時代から近世の遺構が本調査区周辺に存在していると推測される。

（廣濱貴子）



(S = 1 : 100,000)



春日山古墳群（南西側上空から）



寺ノ脇遺跡 I区第2遺構面検出状況（南西から）

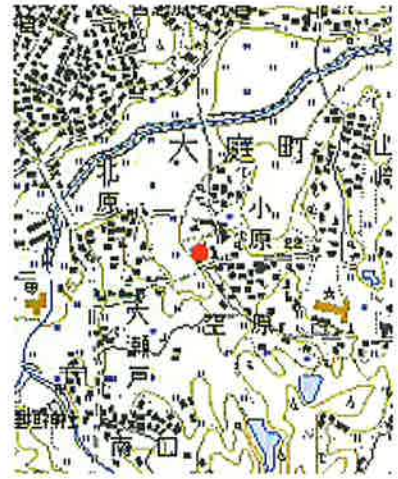
砂口遺跡

砂口遺跡は、(仮称)砂口団地造成事業計画に伴い、平成18年12月から平成19年1月にかけて松江市教育委員会が行った試掘調査により、遺構・遺物が確認されたことから、その存在が判明した遺跡である。

調査は、造成事業において、地下の遺跡に影響があると判断された合併浄化槽設置部分(4箇所)と、試掘により推定された遺跡の範囲内にかかる公衆用道路設置部分を対象とし、遺跡の詳細を明らかにするために、発掘調査を実施したものである。調査期間は平成19年4月16日から平成19年4月27日まで、調査面積は70㎡である。

調査の結果、古墳時代の中期の住居跡と推定される遺構が確認され、この遺跡が当時の集落の一角であったことが推察された。

また、大きさ数10cm～数mの大きささまざまなピットを多数検出したが、この遺物を成すピット内で宝珠つまみの蓋が検出されたことから、同時期の掘立柱建物跡の可能性もある。少量ではあるが、弥生時代中期の遺物数点とそれを伴うピットも検出されている。こうしたことから、本遺跡は弥生時代中期から中世にかけて断続的に営まれた集落地の一角であったと思われるのである。(中尾秀信)



大坪遺跡

平成9年に、地元自治会から市道真名井神社線の松並木復元の陳情書が提出されたことを受け、松江市が市道の拡幅を含めた松並木の整備計画を策定したが、当該地は国史跡出雲国府跡の指定地西端にあたることから、事前に発掘調査を実施することになった。調査は、圃場ごとに北から1～15区の調査区を設定し、平成11年度から平成13年度にかけて、数区画ごとに断続的に調査を実施し、弥生時代から古代にかけての遺物・遺構を多数検出した。

平成19年度、最終調査区となる13区の調査を実施したものである。調査区は、南北17mの圃場内に、市道の拡幅予定範囲となる、東西10m（道路端から法面と側溝、畦を残す）の範囲で設定した。調査期間は平成20年1月4日から同年3月14日で、調査面積は160㎡であった。

調査の結果、予想された条里制に関する遺構は全区画を通じて検出されなかったが、以前の調査を含めて、古代の木簡や、弥生時代前期から始まる遺構の存在が明らかになるなど、貴重な資料が得られた。特に今年度は、弥生時代の住居跡が検出され、当地域で不明であった弥生時代からの集落の存在が推測され、出雲国府跡関連時期以前の歴史的環境に新たな知見を加える調査になったものと考えている。

(中尾秀信)



能登堀遺跡

本遺跡は、松江市宍道町宍道地内に所在する。V字状の緩斜面に位置し、現在は畑として利用されていた。平成19年2月に宍道中央線道路改良事業の工事予定地において、松江市教育委員会が試掘調査を行ったところ、遺構・遺物が確認された。このため、すでに周知の遺跡（散布地）であった能登堀遺跡（H169）の範囲の広がりを確認できたものとし、工事予定地内における遺跡の詳細を明らかにするために発掘調査を実施したものである。調査は平成19年9月1日から同年12月28日まで、道路設置予定地となる幅約8m、長さ約50mの範囲で実施し、側道部分を含めて約570㎡である。



調査の結果、本遺跡は、時代的には、古墳時代後期と、古代末から中世の2つの時期に遺跡のピークがあり、当時の人々はその時期に活発に活動していたことを物語っている。特に、古代末から中世にかけての遺物として、中国製の輸入磁器が出土したことと合わせて、発見例の少ない中世の石製硯が出土したことは、この付近に文字の書ける有識者がいた可能性を示唆する。また、調査地南側の緩斜面にあると考えられる能登堀遺跡の中核部分の様相を、そこからの流入と考えられる包含層出土遺物の様子から伺うこともできた。古墳時代後期には祭祀が行われたと考えられる溝状遺構も検出され、今後、遺物の精査等により当時の祭祀風景の復元を期待できる調査例となった。なお、地滑り地帯という特殊な立地条件から、溝状遺構の切り合い関係等の判別が極めて困難であった。（中尾秀信）



大勝間山城跡

所在地 松江市鹿島町656-5
調査原因 道路建設
調査期間 20070403~20070518

遺跡番号 K-42
調査面積 360㎡
担当者 江川 幸子

位置と環境

松江市街地の北西約20kmの独立丘陵で、尼子方の地頭が山城を築いている。遺跡の西側には松江と恵曇を結ぶ県道が走り、さらに西には江戸時代に開削された運河佐陀川が流れて宍道湖と日本海をつないでいる。調査地の南東200mには国指定史跡佐太講武具塚がある。



位置図

検出遺構

弥生時代後期の加工段や溝のほか、江戸時代の佐陀川開削に関連する揚土置場の造成跡を検出した。

出土遺物

弥生土器が多数出土したが、いずれも風化が著しかった。佐陀川開削時の揚土の中から須恵器や縄文土器が少量出土した。



完掘状況

所 見

平成18年度からの継続事業である。

平成19年度は、調査区下半斜面について調査を実施した。上方では弥生時代の竪穴住居跡を4棟検出したが、下半斜面では斜面がやや急勾配であったためか加工段遺構を中心に検出した。時期的には竪穴住居跡1棟が弥生中期であったほかは、すべて弥生後期末の遺物を伴う遺構であった。

現在では鶯の澄んだ声が響く現地であるが、弥生時代の後期には雛壇住宅団地のように開発・利用され、多くの人々が居住して賑やかな声が響いていたことであろう。

また、尼子復興戦や佐陀川開削時においても、ここはその時代の大きな舞台の1つとなったようである。



現地説明会風景

西屋敷遺跡

所在地	松江市大庭町字西屋敷885-2他6筆	遺跡番号	D-1058
調査原因	アパート建設	調査面積	170㎡
調査期間	20070601~20070718	担当者	江川 幸子

位置と環境

松江市街地の南東約5km、神魂神社から北へ700mの地点に位置する。周辺には山代郷正倉跡や黒田畦遺跡、出雲国造館跡、団原遺跡など古代出雲の重要な遺跡が数多く分布し、律令時代の重要な場所の一角といえる。



位置図

検出遺構

高い密度のピットを検出した。直径が小さいわりに深く、埋土は単一層のものがほとんどで先細りのものが多かった。ほとんどが杭や木の根痕と思われる。

出土遺物

地山遺構面を覆っていたクロボク層から角のとれた須恵器破片少々が出土したが、地山遺構面直上から昭和の10円玉硬貨が出土した。

所見

調査地の立地や字名「西屋敷」から、古代出雲国に関連する遺構が検出できるのではないかと期待したが、後世の人間の活動の痕跡（昭和時代）ばかりを確認する結果に終わってしまった。

しかし、そのことは古代の遺跡の存在を全く否定するものではなく、仮に古代の遺跡が存在していたとしても既に消滅した状況にある、または近接地に古代の遺跡が埋もれている可能性があるにとらえたい。たとえわずかではあっても須恵器の破片が出土しているのである。



調査前風景



完掘状況

清水遺跡

所在地	松江市鹿島町佐太宮内636-2・660-5・660-7	遺跡番号	K-107
調査原因	アパート建設	調査面積	300㎡
調査期間	20070726~20071026	担当者	江川 幸子

位置と環境

松江市街地の北西約18km、出雲二宮の佐太神社から北へ300mの地点に位置する。北は中世の山城芦山城がそびえ、道路を挟んで東側には運河佐陀川が流れている。西の谷の奥には、佐陀川工事の人夫に宿を提供したと言い伝えが残る新宮家の人々が現在もなお住まいしておられる。

検出遺構

中世の湿地を埋め立てた土地造成の遺構や、近世のピット群を非常に高い密度で検出した。

出土遺物

中世の土師質土器の鍋や12世紀の中国製青磁碗もわずかに出土したが、江戸時代の肥前系磁器の破片や土師皿の破片が大量に出土した。

所 見

調査区は朝山氏が築城した芦山城の南麓にあたることから中世豪族の居館跡が出土するのではないかと期待していたが、中世においては湿地が入り込んだ場所であった。

この湿地は江戸時代、17世紀後半～18世紀半ばの陶磁器類を含む層で埋め立てられていたことから、18世紀半ば頃に造成され、その後掘立柱建物が建てられたと解釈してよいであろう。おりはあたかも清原太兵衛が運河佐陀川を開削しようとした時期である。大きなピット群からは新宮家の館跡もしくは佐陀川開削事業にかかる重要施設、小さいピット群からは人夫宿の掘立柱建物跡が復原できるかもしれない。新宮家の言い伝えと重ね合わせると、非常に興味深い遺跡である。



位置図



近世ピット群検出状況



土地造成状況

石台Ⅱ遺跡

所在地	松江市東津田町1325-65・1325-67	遺跡番号	D-1063
調査原因	道路建設	調査面積	73㎡
調査期間	20071225～20080228	担当者	江川 幸子

位置と環境

松江市街地の南東約3km、馬橋川の下流一帯に石台遺跡が広がっている。かつて馬橋川の川原をトレンチ調査した際には土坑の中から大量の縄文晩期の土器と石錘が出土したほか、別の調査では、12世紀前後の中世遺物が大量に出土したと報告されている。

検出遺構

標高0mまで掘り下げると、流水の堆積作用による粗砂層と泥炭層が観察され、その上には厚さ50cm近い泥炭層が堆積していた。その上が昭和時代の水田耕作土層となっており、遺構は検出できなかった。

出土遺物

中世土師質土器の細片化したものがほとんどで、一部弥生時代前期土器の破片が混じっていた。大きめの遺物としては土錘4点、縄文土器1片が出土した。

所見

調査区とその周辺は軟弱地盤であるため、長さ10mの矢板で囲んで調査に入る計画であった。しかし、矢板が入らない場所があり、矢板施工業者から地表面下2.5m迄しか安全確保はできないとの報告があった。

標高0m付近の粗砂層から比較的残りの良い縄文土器片が出土したので、もっと掘り下げたいという気持ちはあったが、安全を優先して諦めた。試しにピンポールを突き刺してみたところ、軽く1mは入ったので、今回の調査では旧馬橋川の流路の上面を軽くさらった程度の調査しかできなかったようである。



位置図



矢板を打って、「さあ作業開始！」



安全第一のため この深さでストップ！